九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# ウイグルの子どもの発達におけるマハッラ(地域共同体)の役割

Ablimit, Rizwan
Ritsumeikan Asia Pacific University

https://doi.org/10.15017/9002

出版情報：生活体験学習研究. 1, pp.39-47, 2001-01-01. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　創刊号　39―47（2001）

# ウイグルの子どもの発達におけるマハッラ(地域共同体)の役割*

リズワン・アブリミティ

# The Role of the *Mahalla* in the Development of Uighur Children

Rizwan　Ablimit

**Summary**　This article reports part of the fieldwork which I carried out on the *mahalla* system in the Uighur community in China and attempts to give the system some careful consideration. The *mahalla* is a traditional social unit peculiar to the Uighur community. It is a place where the children start to learn by experience to be good members of the society. The *mahalla* drills the children in developing sociability such as associating with other people, and in so doing they learn, in the society, how to act properly and to behave themselves. The point is that such learning is fostered by children of different ages playing on friendly terms.

## はじめに

現地調査に基づいてウイグルの子どもたちの日常生活を描いた『写真と文で綴る――いじめのない子どもたちの世界』(横山正幸編、1998年)において、横山正幸はウイグルの子どもたちについて「いじめや不登校がほとんどなく、いつでも目を輝かせ、学校が大好きというし、皆明るく、生き生きした表情をしている」と述べており、その理由は「彼らの日々の生活や家族のあり方、あるいは、おじいちゃん、おばあちゃん、そして地域の人々との人間関係などにあるのではないか」と指摘している。碇浩一（1997年）はウイグルの子どもたちの健やかな明るさについて、豊かな子どもと年寄りの関係の視点から注目し、次のように述べている。「子どもと老人の関係の豊かさがとりもなおさず文化の基盤である」。このようなウイグルの子どもたち特有の明るさや豊かな人間関係は、横山正幸が指摘しているように、その背景にある彼らの生活環境と切り離して考えることはできないであろう。この意味で、学校や家庭など、子どもたちの成長過程における生活環境を構築する「場」に注目する必要がある。ここでは、このような場のうちの一つ、すなわち、オアシス住民ウイグル人コミュニティーの末端単位であるマハッラに注目したいと思う。

具体的には、中国新疆ウイグル自治区の南に位置するカシュガル、ホータン、アクスなどの地区をとりあげ、ウイグル人のマハッラという地域社会(地域共同体)が、人間形成の場として子どもたちの成長過程に与えている影響、また、体験学習の場として果たしている機能などについて検討する。その上で、その場において培われる豊かな人間関係の有様について明らかにしてみたい。

連絡・別刷請求先（Corresponding author）
立命館アジア太平洋大学（〒874-8577 大分県別市十文字原 1-1）リズワン・アブリミティ
＊本報告は文部省国際学術研究学術調査「ウイグル民族と日本の子どもの生活環境の比較研究」（代表：碇浩一）の中で、筆者が 1996～1998 年に行ったフィールドの一部である。

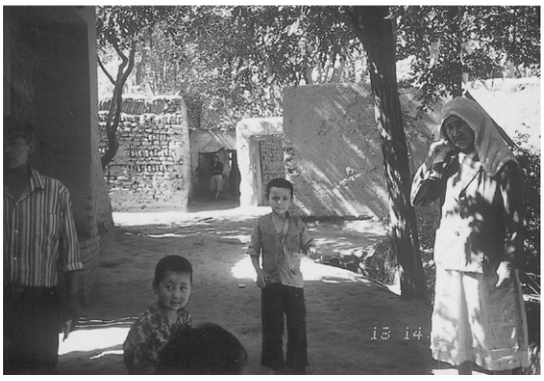
## 1．マハッラについて

### (1)　マハッラとは

マハッラは、執筆者が知る限り、中央アジア一帯に点在するコミュニティーの末端単位のことである。都市におけるマハッラについて帯谷知可（1998年）は、「中央アジア史、特に都市史の上では重要な概念で、一般的に『街区』と訳される。都市の内部において、ある程度の独自性をもって存在する小地区の単位であると同時に、それはある種独特のコミュニティー社会をも形成していたと考えられる」と述べている。新疆ウイグル自治区のウイグル人社会に限定して言えば、マハッラは小さいものから大きなものまで、その規模や形式は種々様々である。マハッラとは、家が集合している居住地の一区画と見なしていいだろう。現在では、マハッラはほぼ南新疆のオアシス地域に限定されるようになったが、ウイグル人口の80％以上がこうしたオアシス地域に居住していることからすれば、ウイグル人社会全体にとってマハッラの存在意義は依然として大きい。

### (2)　マハッラの形成プロセス

そもそもマハッラのはじまりは、親戚の居住区域が時とともに拡大していったことによるものとされているが、現在のところ、その形成プロセスの実態についての実証的記述や報告の類は見当たらない。しかし、概念的にはおよそ以下のような過程が考えられる。ある家の男の子どもが結婚すると親の家の隣に住まいを設け、次にその息子が結婚するとまたその隣に住むようになる。つまり、できるだけ親の家の近くに家を構えるということである。またその子や孫がその周囲に拡大しながら隣接して居住する。このようにして、次第に親族によるマハッラのコミュニティーが形成されるに至ったと想定される。しかし、現在のマハッラは、必ずしも親戚同士のみが一つのマハッラを形成するという形態をとっているわではない。



タリム盆地の西に位置するカシュガルの郊外にあるマハッラの一角

### (3)　規模・由来など

一般的にマハッラの規模にはかなりの差があり、10世帯足らずの小規模なマハッラから、100世帯を超すような大規模なマハッラまで種々様々だが、僻地になるとその規模が小さくなるのに対し、町の近くになると、規模は次第に大きくなる傾向にある。

マハッラはそれぞれ名称があり、その地域の特徴と密接な関係をもっている。例えば、宗教、地勢の特徴を示したもの、先祖が営んだ職業に由来するもの、現在従事している職業にかかわるもの、居住民の特徴や性格を表わしたものなど多岐にわたる。マハッラの名称の由来は、人々の生活の基盤を反映しているのである。

### (4)　マハッラの意味

歴史上、マハッラは様々な行政区画単位としての役割を担ってきたが、現代中国の政治体制下におけるマハッラは、行政管理の単位として認められているわけではない。しかし、ウイグル人社会においてマハッラは、先祖代々より現在に至るまで地域共同体を形成する末端単位としての存在意義をもっていて、とくに宗教に基づく冠婚葬祭や、年間行事においては大きな役割を果たしている。

以上のようにマハッラとは、オアシスの民であるウイグル人の伝統的居住拠点である。それは一つの伝統的なコミュニティーとして存在するだけではなく、子どもたちの成長や豊かな人間関係の形成の上で、さらに人々の帰属意識の母体として、極めて重要な位置を占めていると考えられる。次章では、マハッラが人間関係において実際どのような役割を果たしているのかを見てみよう。

## 2．人間関係におけるマハッラの機能

### (1)　生産活動における互助システム

マハッラのもつ役割に、生産活動における互助システムとしての機能が大きい。新疆社会学会が1987年にカシュガルとホータン地域を対象に行った調査で、この互助システムについて次のように報告されている。

ホータンの農村地域のマハッラでは、「人々の間で契約によらない自発的『換工制度』が行われている」。つまり、「農作業が忙しい時、マハッラの人々がお互いの家の播種と収穫の時期をずらして順番に農作業を手伝うということである。これは、地縁関係によって自発的な生産互助組織を形成し、各家の労働力不足を解消するという近隣同士の親密な関係を示している」(続西発編『南疆脱貧問題社会学調査』、1991年)。また、筆者の調査でも同様のことが明らかになった。カシュガル地区ソフ県ブラフス郷オスタンボイ村を訪れて村落の生業について聞き取りを行った際、23才のＧさんをはじめ多くの農家の人々は「農作業が忙しい時期、特に収穫期には、兄弟や親戚、それにマハッラの皆さんに手伝ってもらっている」と答えた。特に、高齢者や身体の弱い人は、必ず、近所の人々やマハッラの共同体全員で世話をするのが慣習である。これはマハッラの人々にとって義務というよりも、昔からの共同体の生活習慣から定着したしきたりである。

例えば、筆者が1996年ホータン地域で行なった現地調査から一つの事例を紹介したい。ホータン県のブザク郷に住むＴさんは97才になる高齢者である。彼の子どもたちは、長男以外、結婚していてそれぞれ自分の家庭を持っている。Ｔさんは妻と60才になる長男の３人暮らしである。長男は知的障害者であるため、Ｔさん夫婦の世話を必要としている。自分の身体も弱ってきているＴさんは次のように言う。「体調のよいときは近くのモスク（イスラーム寺院）に行ってみなさんと一緒にお祈りするが、体調がすぐれないときは家でお祈りをする。家では、羊など家畜の世話をしている。土地は持っているものの、歳をとって農作業ができないので、食べる分だけの畑仕事は子どもやマハッラのみなさんに加勢してもらっている」。

次に、同じ調査の際、筆者が出会ったある年輩の独り暮しの女性の例を挙げよう。この女性には一人娘がいるが、その娘は少し離れた村に嫁いでいるため、半月に一度しか実家に戻ることができない。この年輩の女性は政府から一人分の農地を与えられているものの、高齢であるため農作業ができない。「マハッラのみなさんに小麦作りを手伝って貰っています。そのほか副食なども、マハッラのみなさんが持ってきてくれます」と彼女は言う。

上の二つの例からわかるように、マハッラにおける人間関係は相互扶助の基盤の上に形成されている。厳しい自然環境における生産活動は相互の依存関係なくして成り立たず、それゆえ、その依存関係がいかに密なるものか、想像に難くない。マハッラでは、豊かで親密な人間関係が醸成され、維持されている。『ウイグル民族と日本の子どもの生活環境の比較研究』（1999年）という報告書に収められているマイマイティ・ライム（買提熱依木・沙依提、1999年）の論文では、オアシスの自然環境と人々との関わりについて「（ウイグル人は）自然の困難を乗り越えるために、一致協力を絶えず必要としてきた。これが（マハッラ）内部の団結を促進し、様々な自然と戦い、それを乗り越えることによって生存していくことができるようになった。さもなくば、自然の困難に呑み込まれてしまうだろう」と述べている。確かに生産活動におけるマハッラの成員相互の関わり合いが、厳しい自然環境によって必然的に形成されたことは否定できない。しかし、現在、このような相互扶助に基づく豊かな人間関係は、生産活動という側面のみに限定されているわけではない。マハッラのもつ機能は、ウイグル人社会における伝統的慣習として定着し、生産活動以外の日常生活の隅々にまで浸透している。この詳細については、次節で述べることにしたい。

**(2)　日常生活における相互扶助システム**

マハッラは生産活動における機能だけではなく、ウイグル人の対人関係においても重要な役割を果たしている。ウイグル人の生活慣習を民俗誌的なアプローチで詳細に紹介することを試みた『ウイグル人の風俗習慣』(1996年)によれば、マハッラにおける相互扶助活動は「その概念は範囲が広く、生産活動から日常生活にまで及んでいる。それゆえ同じマハッラの出身者同士は親戚であるような感覚をもち、何よりも仲睦じくすることを重要視する」。さらに、同書は、このような日常生活における相互扶助を基盤とした接触から生み出される豊かな人間関係の在り方は、特に冠婚葬祭での助け合いにおいて最も具体的に表れるとして、次のように記述している。

「ウイグル人の居住地域マハッラでは、冠婚葬祭が行われると、そのマハッラの人々はもちろんのこと、さらに周辺のマハッラからも多くの人々が手伝いに

やってくる。ある家で結婚式が行われる場合、それを聞いたマハッラの人々は自発的にその家を訪ね、『何か手伝うことはないでしょうか』とその積極性を示すのである。結婚式の当日は客に出す食事の準備から接待など、すべてがマハッラの人々によって行われる」、「葬式においても同様である。医療技術が発達していないところでは、人の死はいつ起こるかわからない。それは、前もって準備することはできない。このような情況では死者の親族はマハッラの人々の助けが必要不可欠になってくる。もし、親族や親戚のいない独り者が亡くなった場合、宗教的儀式から葬式まで、すべてマハッラの人々が執り行い、最後の野辺送りまでする」。

このように、冠婚葬祭を行う専門業がない、伝統的暮らしが生きている社会では、冠婚葬祭を執り行う場合、人々は、マハッラの助けを必要とするということを、十二分に認識している。マハッラの住民たちは冠婚葬祭をはじめ、その他年間行事を文字どおり日常生活の一部と見なし、自分たち自身のものとして積極的に参加する。マハッラにおいて醸成された豊かな人間関係は、上記の冠婚葬祭に象徴されるように、互いに助け合うことを基盤にした日常生活から生み出されたものである。その相互の信頼関係は磐石である。そのような信頼関係は精神的助け合いにも及んでいることを明記しておきたい。

ここで注目すべきことは、このような互助行為が決して義務的にも、企図的にも行われるのではなく、自発的なものであり、自然なものであるということである。このようなマハッラの互助関係による豊かな人間関係は「伝統的に代々受け継がれている慣習のひとつである」(『ウイグル人の風俗習慣』、1996年)として位置付けられている。では、マハッラの相互扶助活動は、具体的にどのような形で執り行われているのであろうか。

主食であるパンを作るマハッラの人々

**(3)「ジャマーアット」の存在**

上で述べたマハッラにおける相互扶助活動のまとめ役としての機能を果たしているのが、「ジャマーアット」と呼ばれる存在である。イスラーム教徒であるウイグル人の社会には、モスクを中心とするジャマーアット（大衆・民衆）という小共同体がある。ジャマーアットは、およそマハッラごとに設置されているモスクを代表する長老たちの集まりであり、マハッラで行われる年間行事や冠婚葬祭、さらに人々の日常生活に関する相談事に至るまで種々様々な問題を取り扱っている。例えば、新免康らによる現地調査（1996年）では、次のような資料を提供している。「マハッラの誰かの家で困ったことがあったり、家を建て直すことなどがあったりした場合、モスクに「ナマーズ」（礼拝）に行った際に、皆に知らせる。ジャマーアットはマハッラの全員に呼びかけて、その家を助ける。また、マハッラで個人的な争いがあれば、ジャマーアットが解決することもある」。また、前掲書『ウイグル人の風俗習慣』（1996年）では次のような具体例が挙げられている。「例えば、誰かの家に病人がいれば、モスクのジャマーアットはナマーズを終えてから全員で病人の家を訪れ、見舞って慰める。また、誰かが何の連絡もなしにしばらくモスクに顔を出さない場合、モスクのジャマーアットの全員がその人の様子を見に家を訪ねる。とくに高齢者つねに訪問して、その様子を伺う」。

このように、とくにウイグル人の農村社会においては、規模の大きいマハッラにはマハッラごとに、規模の小さいマハッラには、いくつかのマハッラごとにモスクが設置されていて、その中には必ず長老を核とするジャマーアットが存在する。マハッラの内部では、ジャマーアットを中心とする活動についての強制でない自発的なルールが成文化されずに設定されている。

こうした日常生活に身近な行為をとおして、特に年長者を中心とするジャマーアットがお互いの存在を確認し、さらに意思疎通を図ることで、共同体としてのマハッラを支えている。それは一種の社会常識として定着しているのである。

### ⑷　マハッラにおける密接な人間関係

以上のように、人と人との生身の関わり合い、とくに自然な形の相互扶助こそが、マハッラの本質である。マハッラにおける血縁・地縁に基づく人間関係は、日常生活における共同作業や生産活動をとおして結ばれる。このような実際の相互扶助によって家と家の繋がりが強化され、マハッラ全体において個人と個人および世帯と世帯の総合的ネットワークが形成され、そのことが共同体としてのマハッラの求心性を維持している。前掲書『ウイグル人の風俗習慣』（1996年）には、「(マハッラの)近所同士は大変親密な関係にあり、互いの喜びや悲しみを共有し、分かち合う。それぞれの苦痛､抱えている悩みなどを互いに聞いたり､慰め合ったりする」とある。というのも、近代的病院のない農村部では、このような近所同士の接触が、互いの心の不安や病気を精神的に癒すこともあるからである。このことはマハッラの人々を強い絆で結ばせ、親密な関係を醸成させ、維持させるのである。他方、都市部には確かに病院がある。しかし、近代医学は人間の精神的な部分のケアまでは及ばない場合が少なくない。したがって、都市部のマハッラも、精神面において、農村部のそれと同じような機能を果たしていることを特筆しておきたい。

## ３．体験学習の場としてのマハッラ

上で明らかにしたように、マハッラにおける相互関係が地域社会の基盤を形成し、さらに充実させていく重要な要素であるとすれば、それがまた、このような生活環境の中で生きている子どもたちの成長にも大きな影響を与えていることは言をまたない。それでは、具体的に、マハッラは子どもたちの発達・成長にどのような影響を与え、どのような機能を果たしているのだろうか。また、子どもたちはその中でどのような体験を学習しているのだろうか。以下、本報告の中核となるこの問題について見てみよう。

### ⑴　マハッラは遊び場

マハッラは子どもたちが多くの時間を費やして思う存分に遊ぶ場であり、遊びを通じて様々な体験を学習する場である。どこのウイグル人居住地域においても、マハッラに足を運ぶと、まず目につくのは子どもたちが群れをなして一緒に遊んでいる光景である。例えば、筆者の現地調査でも明らかになったことだが、調査地域であるカシュガル、ホータン、アクスに点在するオアシスに行くと、マハッラではたくさんの子どもたちが遊びに熱中している。遊んでいる子どもたちは外部から人が来ていることに気づくと、雲霞のごとく集まってくる。

１）離乳期以後の子どもは外で遊ぶ

実際、離乳期以後、小さい子どもは外で過ごす時間は長く、そのことが一種の社会的慣習のようになっている。1996年の調査での事例を挙げてみよう。母親が子どもを抱いて育てるのは１歳半から２歳までで、その頃が離乳期である。調査データでは、それ以後、次第にその幼児は年長の女の子が世話するようになり、母親はだんだんと家事労働に戻っていく。ホータン郊外に住む女性Ａさんは「子どもは２歳まで母親の後についてまわるが、その後はほとんどマハッラで遊び、お腹が空いたときにしか帰ってこない。時には、子どもは他人の家にいって食事することもある」と述べている。

もう一つの例として、ノルウェーの文化人類学者Ｈ氏が筆者に語ってくれた大変興味深い体験談を挙げよう。Ｈ氏は1998年２人の子どもを連れて中国を訪れたのであるが、最初、北京にしばらく滞在し、のちにカシュガルに行った。北京でもカシュガルでも大変な歓迎を受け、子どもたちも可愛がってもらったという。しかし、子どもに対する両地域の人々の対応の仕方に違いがあることを感じたとのことである。北京では子どもは家の中において、常に親が保護できる範囲で遊ばせた。Ｈ氏の子どもも、その扱いは例外ではなかった。ところが、次に訪れたカシュガルの家では、Ｈ氏の子どもも含めて、まず子どもたちに食事をさせ、そ

マハッラで遊ぶ子どもたち

れから外で遊ばせたというのである。その後に訪れたカシュガルの別の地域の家でも、扱いは同様であったという。この例からもわかるように、マハッラの子どもたちは、一日の大部分を家の外で遊んで過ごしていると言っても過言ではない。

2）子守りは、一緒に外で遊ぶこと

一方、年長の子どもについて言えば、一般的に、マハッラの子どもたちは12〜13歳になると家事の手伝いのひとつとして「子守り」に従事するようになる。小学校の高学年から中学校の低学年にかけて徐々に親の仕事や家事の手伝いをするようになり、その一環として、多くの場合、弟や妹の子守りをする。重要なことは、そのような子守りの仕事が子どもたちに年下のきょうだいと一緒に遊ぶ時間を与えるということである。現地調査に基づいて横山正幸・横山あづまによりまとめられた「ウイグルの子どもたちの生活が教えてくれること」（横山正幸編、1998年）には、「遊びについて」として次のように記述がなされている。「ウイグルの子どもたちは実によく遊んでいる。…それも一人や二人での遊びではない。…時には10人以上の子、それも大きい子、小さい子が一緒になって遊んでいる。なかには弟や妹を抱っこして参加している子どもさえいる」。

換言すれば、大きな子が小さな子を連れて遊ぶということは、忙しい親に畑仕事や家事に専念できる時間を提供するということである。他方、子どもたち自身にとっては、きょうだいの絆を深めるとともに、「人が社会の中で生きていくうえで最も大切な能力である社会性を身につけていっていると考えられる」（門脇厚司、1999年）。この意味で、マハッラという共同体は、いつも子どもたちに友達と一緒に遊ぶ環境を与えているのである。

3）「子どもは遊んで大きくなる」

マハッラが子どもたちの遊びの場であるという特色をもつことは、マハッラにおける人々の生き方と一体不離の関係にある。とくに注目すべきことは、都市部においても農村部においても、遊ぶということは「外」で遊ぶことを意味し、「遊ぶことが子どもの仕事であり、子どもは遊んで大きくなる」ということを、年寄りをはじめとするウイグルの人々（マハッラ居住者）が共通して認識していることである。

きょうだいはいつも一緒

次に挙げる例は、ウルムチ市内に住むあるウイグル知識人家庭の子どもの勉強と遊びをめぐるケースである。この家族には７歳になる男の子が一人おり、典型的な核家族である。この男の子の一週間のスケジュールは、月曜日から金曜日の昼までは両親と一緒に過ごし、金曜日の午後から週末にかけて同じ市内に住む祖父･祖母のところで過ごすことになっている。両親のところでは､昼間は学校に行き､夕方になると家に帰って食事をしたり、宿題をしたり、翌日の授業の予習をしたり、また、時間に余裕があれば家の中で遊んだりもするが、実際、宿題や予習が終わると次の朝が早いので、直ぐ寝てしまうことが多いという。金曜日の午後になると、男の子は一週間楽しみにしていた祖父･祖母の家に行く。祖父･祖母の家に着いて、挨拶をすませるや否や、彼を待っている友達と一緒に脱兎のごとく家を飛び出し、遊びに行ってしまう。男の子が、祖父・祖母の家に行きたくてたまらないのは、実は、一日中マハッラで遊ばせてくれるからであった。実際、男の子が祖父母の家に来ると一日中外で遊んでいるという。

ウイグル人社会では祖父は家族の中で権威的存在であり、男の子の母親も自分の父親には逆らえない。その祖父は上述の「遊ぶことが子どもの仕事であり、子どもは遊んで大きくなる」という考えに基づいて、次のようにいう。確かに「学校は子どもたちに知識を教えてくれる場として大きな役割を果たしている。しかし、それ以外の能力はほとんど遊びという体験学習の中で獲得していくものだ」と。このような祖父の考えに対して、男の子の母親は、自分自身も子どものころ同じような体験をしてきたので、一応の理解は示すも

のの、子どもが学校の授業について行けなくなるのではないかと不安である。

こうした心配は、ことこの家族だけの問題ではない。確かに、近年、急激な社会変動によって現実社会と伝統的養育法との間に多くの矛盾が生じている。また、もともと大学への進学が厳しい中国では、就職問題も絡んで、学歴重視の社会が一段と進んできている。こうした社会的背景は、子どもの将来のために教育を最優先するという親の考え方を増長させている。しかし、「遊ぶことが子どもの仕事であり、子どもは遊んで大きくなる」というような考え方が根強く残っていることも、また、事実である。マハッラにおける子どもたちの遊び声は絶えることはないだろう。というのも、マハッラが体験学習の場として子どもたちの発達・成長に大きな影響を与え、人格形成の機能を果たしていることが、ウイグル人一般の遊びを重要視する意識によって支えられているからである。

以上のように、ウイグル人の子どもたちは、マハッラにおける生活の有り方を背景として、今なおほとんどの時間、外をかけ巡り遊び回っている情況を見た。それでは、「遊び」の場となっているマハッラが子どもたちの人間形成の上でもたらす意義は何であろうか。この問題について、次節で見てみよう。

**⑵　マハッラの教育的役割**

１）社会性の獲得

前節では、マハッラにおける子どもたちの遊びの有様について述べた。ここで最も重要なことは、子どもたちが外での遊びをとおして、種々様々な体験をし、人とかかわり、人間関係の構築・調整能力といった社会性を発達させているということである。横山正幸（1998年）は遊びについて次のように指摘する。「人と人のかかわりをスムーズにやっていくには社会性が大切である。幼児期から児童期にかけて活発に展開される遊びのなかで繰り広げられる、喧嘩や助け合いを含む子ども同士のダイナミックな活動を通じて、そのベースが育まれるのである。遊びはまさに子どもの健やかな発達にとって、なくてはならない『体験学習』なのである」。さらに、門脇厚司（1999年）は子どもの「社会力を育てるには、他者との相互行為がきわめて大事である」ことを強調している。このような見解に基づくならば、マハッラにおいて自然に形成された子どもたちの遊びの場は子どもたち独自のコミュニティーとして存在しており、それは子どもたちの社会性を形成する上で大きな機能を果たしているといえよう。というのも、上で述べたように、マハッラでは、大きな子も小さな子も交わって遊び、小さな子はそうした遊びのなかで、親に教えられるより先に、大きな子の振り舞いを模倣し、人間関係の在り方を体験するのである。この意味で、マハッラという地域社会は、まさに子どもたちの生活体験を学習する場であり、その中で社会性という能力を高めることができるのである。

２）マハッラの日常生活における活動・礼儀作法の学習

マハッラにおける子どもたちの種々多彩な体験は、子どもたちが成長していく環境、すなわち、上で述べたマハッラの人々の人間関係、生活態度、共同作業、さらに日常における礼儀作法などを学んでいく環境と密接に関連している。その背景の一つとして次のような例を挙げてみよう。

前掲新疆社会学会が行った調査（続西発編、1987年）では、次のようなことが報告されている。南新疆のカシュガル、ホータンなどに居住する「人々の礼儀作法は、素朴で且つ飾り気がない。人と出会った際に、相手が男性であれ、女性であれ、または知人であれ、見知らぬ人であれ、みなきわめて慎み深く、温厚な態度で接する。お互いに深々とお辞儀しながら両手で握手し、低い声で挨拶する。親切で暖かさを感じさせる」。

このような礼儀作法や、上記で紹介した生産活動や、日常生活における互助システムをマハッラの「文化」（「習慣」）と位置づけるとするなら、子どもたちはこのような「文化」の中で、例えば、常に親同士の礼儀作法と接したり、親が他人（隣人）の家で手伝っている姿を見たり、また、親が手伝っている家のお使いをするといったことを体験し、それが子どもたちの後の人生に大きな影響を与えることになる。実際、子どもたちは子どもたちなりに大人に倣って、遊びながらも友達の家の手伝いをしている。

筆者の前掲の調査（1996年）で、次のような光景に遭遇した。12、13歳の数人の男の子たちが、雪解け水の流れる用水路に溜まった土砂をシャベルで除去していた。その子どもたちに「何しているの」と尋ねたら、

子どもたちは「遊んでいるんだ」という。筆者の目から見ると、それは遊びではなく明らかに労働であった。そこでさらに詳しく尋ねると、その場所はM君の家の前の用水路であり、砂がいっぱい溜まっているため、水が溢れてくれば家の庭に流れ込む心配があった。そこで、M君が遊び仲間に頼んで一緒に砂をかき上げていたというのが事の次第である。その時の子どもたちの姿は目を輝かせ、真剣そのものであった。M君の家の前の作業が終わると、次にE君の家、K君の家に…行くのだという。それは子どもたちにとって遊びなのだが、まさに遊びのなかでの体験学習であった。

**⑶　マハッラと学校教育**

現在、新疆ウイグル自治区南部の農村オアシス地域においても初等学校教育が普及してきており、90％以上の子どもたちが小学校で初等教育を受けている。こうした情況において、体験学習の上で重要な機能を果たしているマハッラは学校教育とどのような関わりをもっているのであろうか。

1）学校で習った知識のマハッラにおける実践

学校で学習したことは単なる知識に終わらず、家庭やマハッラでの生活と何だかの形で関わっているというのが筆者の想定である。例えば、マハッラは子どもたちにとって学校で学んだ知識(読み・書き・計算)を発揮し、親や近所の人が字を書けない場合、代わりに読み・書き・計算をしたり、あるいは、高学年のきょうだいが、自分の低学年のきょうだいやマハッラの子どもたちの宿題をみたり、分からないところを教えたりする。このように、学校で学んだ知識は実践の場を得るのである。学校で文字を学んだ結果、生活の中で読んだり、書いたりできるようになる。さらに、算数を使ってお金の計算がスムーズにできるということは、

M君の家の前の用水路を掘っている子どもたち

子どもたちにとって感動的なことである。

確かに、新疆の近代化された都市部では、勉強は入試の手段として意味が大きい。しかし、オアシスにおけるマハッラの子どもたちにとっては、学んだ知識は生きる手段として実用的である。家庭での手伝いもできるし、遊ぶの場でその知識を年下の子どもたちに教えることもできる。こうして学校で得た知識は、家庭やマハッラで実践され、子どもたちの内面世界で消化されていくのである。

2）学校教育の側の配慮

他方、学校もマハッラの事情を考慮して、学校行事を計画している。たとえば、1996年9月25日、ホータン県ブザック郷K村の中学校を訪れた時の例を挙げよう。この学校には12のクラスがあり、576名の生徒が在籍していた。しかし、学校は9月26日～10月7日まで休みであったため、結局筆者の目指した調査はできなかった。つまり、この期間は農繁期であり、子どもたちが親の手伝いをできるように学校側が休みを設けていたのである。この例は、学校とマハッラの教育機能が役割分担を果たしているという状況をよく説明している。

3）マハッラと学校の相互補完関係

近代社会においては、学校が子どもにとって知的好奇心を満足させてくれるかけがえのない場として、大きな役割を果たしている。それは箕浦康子(1996年)が社会の意味体系と学校教育の関係に関して指摘しているように、「乳幼児の発達が、歴年齢の規定を大きく受けていたのに対し、児童期以降は、文化的環境の影響を大きく受ける。児童期の子どもは、週日は目覚めている時間の半分近くを学校で過ごす。義務教育導入前は、家庭や地域社会が子どもを一人前に育てるのに大きな役割を果たしていたが、現代では学校の役割が大きい」。確かに、ウイグルの子どもたちにとっては、学校は子どもたちの知的好奇心に応じて、いろいろな知識を与えてくれる役割を果たしている。これに対してマハッラという環境では、学校で得た知識を実践しつつ、様々な生活体験を学習しつつ、社会性という能力、さらに日常生活での礼儀作法など基本的生活習慣を習得する。すなわち、学校では知識を学び、マハッラでは生きていく知恵を身につけていくのである。

このようにして、学校教育とマハッラ共同体は教育

システムとして補完しあっているのである。その結果、子どもたちにとって学校は決して苦痛の場ではなく、生活の一部として興味の対象となる。子どもたちがいつも「学校が大好き」という背景の一つにマハッラの存在があるのである。この意味で、マハッラは子どもたちにとって遊ぶことのできる第二の学校であると位置づけしてもいいだろう。

## 4．おわりに

以上、文献資料と現地調査に基づき、ウイグル人社会におけるマハッラの機能と、その果たす役割について幾つかの項目を追って見てきた。マハッラは、ウイグル人の生存手段として必要不可欠なシステムである。本報告の結論として、次の四点を挙げることにしたい。

第一に、マハッラは、その構成や形式から自明であるように、また、地名の由来が人々の生活の基盤を反映していることからも窺われるように、単なるコミュニティーとして存在するに止まらない。それは、親戚同士が近くに住むことから始まり、さらに歴史の変遷とともに現在の形に発展したものである。マハッラの成員たちは、心の拠り所として、自分たちの祖先と密接に繋がりをもっているということになる。

第二に、マハッラにおいては近所同士の自然な相互扶助システムが、昔からの共同体の生活慣習として定着しているという点である。その中で豊かな人間関係を築き上げることが最重要視されている。このようなマハッラの機能は、特に長老たちによるジャマーアトによって支えられている。ジャマーアトの役割はある種の力としてマハッラ・コミュニティーに潜在している。

第三に、マハッラは、子どもたちに遊ぶ場を提供しており、遊びを通じた「体験学習」を実現しているということである。子どもたちは遊びのなかから人とのかかわり、人間関係能力といった社会性を発達させるとともに、生活の様々な場面における振る舞い・共同作業・礼儀などの在り方を体験的に学習する。また、そのような「体験学習」は異なった年齢の子どもたちが一緒に遊ぶなかで、お互い触れあいつつ行われる。

第四に、マハッラという環境は、学校で吸収した知識を実践し、消化する場である。マハッラのもつ教育的機能は、学校教育と相互補完的な関係にある。

マハッラでの成長は子どもたちにとって重要な意味をもち、そこでの経験をとおして子どもたちは将来のマハッラを支えていく力を貯えるのである。このような存在意味を維持しつつ、マハッラは次の世代へと受け継がれていくことだろう。

以上のように、本報告では、マハッラの機能について幾つかの側面を見、検討を加えた。しかし、本報告では、子どもたちがマハッラの生産方式、生活様式、価値体系などと、具体的にどのようにかかわっているのか、また、大人と家庭教育の面でどのような繋がりをもっているのか、といった問題については考察するに至らなかった。これらの問題に関しては、筆者の今後の課題としなければならない。

## 参考・引用文献


⑴　横山正幸編『写真と文で綴る――いじめのない子どもたちの世界』（北大路書房、1998年５月）

⑵　碇浩一「シルクロードの子どもと老人――異文化としての子どもと老人」（口頭発表：第４回多文化間精神医学会・演題抄録、平成９年２月７～８日）

⑶　帯谷知可「タシュケントの「マハッラ」体験」、（月刊『みんばく』1998年８月号）

⑷　『新疆ウイグル自治区墨玉（カラカシュ）県地名図志』（墨玉県人民政府地名弁公室、1985年）

⑸　続西発編『南疆脱貧問題社会学調査』（新疆大学出版社、1991年７月）

⑹　買提熱依木・沙依提「新疆ウイグル自治区カシュガル、ホータン地区におけるウイグル人の子どもたちの生活環境とバイリンガル教育」文部省科学研究研究報告書『ウイグル民族と日本の子どもの生活環境の比較研究』（1999年３月）

⑺　Abdukerim Rahman, Reweidulla, Sherip Hushtar, *Uighur Orp Adetliri* Shinjang Yashlar-Osmurlar Nashriyat, 1996.

⑻　門脇厚司『子どもの社会力』（岩波新書、1999年12月）

⑼　箕浦康子『文化のなかの子ども』（東京大学出版会、1996年７月、第２版）

⑽　文部省科研費国際学術研究学術調査「イスラーム圏における人間移動と共生システムに関する調査研究」（研究代表者：家島彦一）、新免康らによる平成８年度調査、調査地：カシュガル